

ことばを選ばせるもの — 敬語の機能の分析から —

堀 素 子

共同研究者 井出祥子、川崎晶子、生田夕子、芳賀日登美

<目的>

敬語、あるいはより広く丁寧表現は、女性の方が男性よりも多く使用しているというのが一般の認識であるが、本研究ではそのような表現上の男女差の実態を調査すると同時に、その無にどのような対人関係、心理的背景があるかを探ろうとしたものである。⁽¹⁾

<調査の方法と対象>

今年6月に、東京近郊に在住する日本女子大学学生がそれぞれの両親にアンケート調査を行なった。有効調査数は男256名、女271名、計527名であった。記入された回答紙はコンピューターに入力し、GLAP5⁽²⁾を使い分析した。

<調査の内容>

質問は4つあり、それぞれについて5段階の尺度で回答を得るように設定した。質問の方法としては、「もっともあらたまった言い方/態度で接する人」を5とし、「もっとも気楽な言い方/態度で接する人」を1として、その間に2, 3, 4の段階を作り、回答者は、言い方(表現)については添付した参考資料の中の50の表現から選び(これ以外の表現が必要な場合はその語を書く)、人物に対しては適宜自分との関係がわかるように記入してもらった。⁽³⁾それぞれの段階につき3つ、あるいは3人まで記入可能としたので、回答者1人につき最大15表現、15人の人物が得られた。

質問1は、「いつ行くか」をたずねる場合の言い方を、相手も場面も設定せず、言語表現だけの丁寧度で5段階に答えてもらった。

質問2は、日常接する相手に対する態度を同じく5段階で答えた。これは相手の人物に

対する待遇度といえよう。

質問3は、前項の相手のそれに対して、「いつ行くか」とたずねる場合は、どういう表現を使うかをきいた。ここで得た表現は、回答者1人1人が持つている各表現の丁寧度(質問1で答えている)でもって、それぞれの相手を待遇している結果であるといえる。

あなうち、ある回答者が、「もっともあらたまった態度で接する相手」にはすべて「もっともあらたまった表現」を使い——あなうち、5の相手には5の表現を使う、というここの他の段階でも平行してあるならば、質問1と質問3の答は完全に一致するはずである。もしそれが一致しないならその理由は何か。一つの可能性として、回答者の相手に対する気持ちをとり上げ、合わせてそこに言語使用に影響を与える男女差をもめようとした。それが次の質問4である。

質問4にはかきさし質問を4つ設定した。あなうち、質問2で挙げた各相手に対して、

- (1) 相手の方が目上だと思うか
- (2) 相手とは大変親しい関係か
- (3) 相手から頼りがいがあると思われたか
- (4) 相手に対して上品でありたいか

のそれぞれに、はい、いいえ、どちらでもないの3選択肢をつけた。

このほか参考資料として、「いつ行くか」の変異形を50、属性のうちの職業を21、出身地を48、学歴を4項目付し、すべてコード番号で回答できるようにした。このほか東京在住の年数、20才までに最もながく住んだ場所等も記入してもらった。なお、質問2の相手の性別・年代も記入してもらった。

<結果>

- (1) 好んで使われる表現はかなり偏っており、可能なあべの表現が万遍なく使われているわけではない。
- (2) 使用される表現の種類は、約2:3の割合で女性の方が多種類使っている。
- (3) しかし丁寧度2以下の表現に限って言えば男性の方が、丁寧度4以上の表現では女性の方が、バラエティに富んでいる。
- (4) 相手の人物に対する待遇度と、その相手に使う表現の丁寧度は、大きな流れとしては平行するが、しないものもいくつかある。(図)
- (5) 平行する理由づけとしては、目上目下意識が4つの気持の中では最も強いと思われる。
- (6) この場合、男性は大体において表現の方が丁寧度が下で、女性は逆に上がっている。
- (7) 配偶者に対する上下意識には、著しい男女差がみられた。すなわち、夫は妻を最も目下と感じているのに反して、妻は夫をかなり目上としている。ただしこれは意識的な回答であるので、本音はどうか不明である。

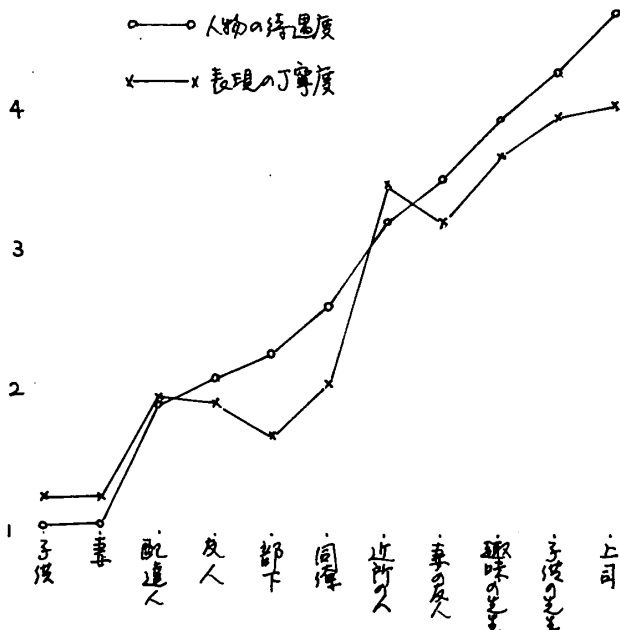
- (8) 男性意識・女性意識を問う「頼りがいがある」と思われたいか、「上品でありたいか」はかなり有効であったが、この年令の女性には女性意識が「頼りがい」を押し上げていると思われるもある。
- (9) 教は少ないが、職業を持つ女性の意識は、男性に非常に近い面があることがわかった。

注

- (1) 本研究は昭和57~58年度文部省科学研究費による特定研究「言語の標準化」のうちの第9班「女性の敬語の言語形式と機能」(研究代表者井出祥子、研究分担者堀素子、川崎晶子、研究協力者生田サ子、芳賀日登美)において行なった調査の集計の一部である。
- (2) 東京大学言語学科荻野綱男氏作製の、言語分析用パッケージ・プログラムの略称。
- (3) 参考資料の中に例として下の図中にあるようなカテゴリーを掲げておいたところ、期せずしてそのカテゴリー名の人物が最も多く挙げられた。

相手の人物の待遇度と、その相手に使う表現の丁寧度の差

5 男性



5 女性

